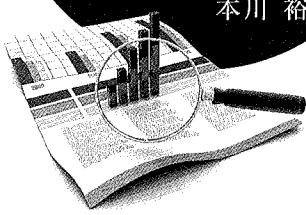


# データが語る “いま”

本川 裕



第15回

## 憂鬱の国際比較

前回は、うつ病にかかる日本人が増えた状況について、厚生労働省の患者調査のデータで確認した。今回は、世界各国と比較した場合に、日本は、うつ状態（不幸福感あるいは落ち込みの状態）に陥る人の数が多いのかどうかについて調べてみよう。

データとしては、国際的な継続的共同調査である ISSP (International Social Survey Program) の 2011 年「健康に関する国際比較調査」を用いる。

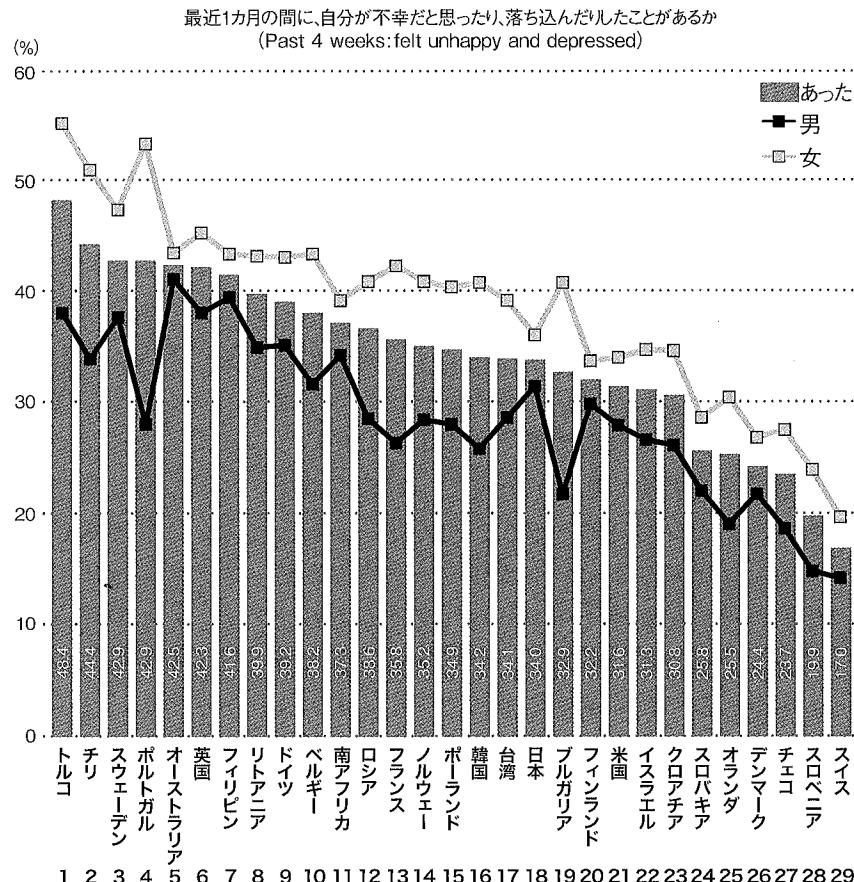
調査を実施した 1 ヶ月間に、「ときどき」以上の頻度で、うつ状態となった人の割合が最も高い国はトルコである。これに、チリ、スウェーデン、ポルトガル、オーストラリアが続いている。

日本は、29カ国中 18 位であった。「うつ状態」に陥っている人の人数としては、日本は他国に比べて、比較的少ないといえよう。日本の自殺率は確かに高いが、だからといって「うつ」も多いわけではない。

実は、これまで統計数理研究所の調査結果でも、アジア太平洋諸国とのなかでの日本の位置について、同じ傾向が現れていたが、今回、ISSP 調査で欧米を含む多くの国の中で確かめられた意義は大きい。

また、ISSP 調査でいう「うつ状態」は、必ずしも「うつ病・躁うつ病」とはかけられないが、OECD による感情障害疾患の罹患率についての欧米主要国との

図 憂鬱の国際比較(2011年)



(注)ISSP(International Social Survey Program)の2011年「健康に関する国際比較調査」による。

「1.まったくなかった、2.ほとんどなかった、3.ときどきあった、4.よくあった、5.かなりあった」という選択肢のうち3~5 の計の割合(わからない、無回答は除く)。日本の調査時期は2011年11月26日(土)~12月4日(日)

(資料)ISSP HP(<http://www.issp.org/index.php>)

比較や、WHO による健康ロス (DALY 値) の世界各国との比較でも、日本の患者率は少ないという結果になっており、両者は整合的であるといえる。

最後に、前回のうつ病・躁うつ病の患者データと同じように、男女別の違いも見ておこう。図表からは、すべての国で、うつ状態に陥る女性の割合が、男性のそれを上回っている状況が見てとれる。自殺率はどの国でも男性が女

性を上回っているが、うつ状態は逆なのである。女性は男性と比較して、自滅的な方向に逃げない(逃げられない)だけに、それだけ、うつ状態に陥りがちなのではなかろうか。

なお、男性に比して、特に女性の「うつ」が多かったのは、ポルトガルとブルガリアである。日本の男女差は、4.6% ポイントと下から 4 番目であり、比較的小さいほうといわねばならない。



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。(財)国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学(株)主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著書に『統計データはおもしろい!』(技術評論社)、『統計データが語る 日本人の大きな誤解』(日経プレミアシリーズ)など。